

# HOMAS 日本語版 ニューズレター

Hokkaido/Massachusetts Society

北海道・マサチューセッツ協会 会報

No.44

平成 17 年(2005 年)3 月 17 日発行  
北海道・マサチューセッツ協会  
会長 森本 正夫

発行所 〒060-0003  
札幌市中央区北 3 条西 7 丁目  
道庁別館 12 階  
TEL011-231-3392 FAX 011-231-3666  
発行人 中垣 正史  
E-mail:homas@siren.ocn.ne.jp

## 北海道開拓の基礎を築いた指導者たち②

### 札幌村の開祖 大友亀太郎と日本畜産の指導者エドウィン・ダン —ダンの指導を受けた町村金弥、そして「町村農場」を創設した町村敬貴—

江戸幕府は、蝦夷地警備のために安政元年(1854)箱館奉行所を設置しました。そして、内陸部開拓のために、二宮尊徳(1787~1856、江戸後期の農政家)一門に協力を要請しますが、安政 5 年(1858)になって、報徳思想を体得した門下生の「大友亀太郎」(1834~1897、当時 25 歳)が、幕府の命令により蝦夷地に渡ることとなりました。

大友亀太郎は、箱館奉行から開墾場取扱いの辞令を受けて、苦勞の末原野を切り開き、道路を作り、用水路を掘って、木古内・大野村・次いで七飯に御手作場(おてさくば・開拓農場)を開設しました。(明治元年(1868)7 月、箱館府の 99 年間租借地契約による、ガルトネル七重村開墾農場は、開拓使が交渉を重ね、明治 3 年(1870)12 月、明治政府が莫大な賠償金を支払って取り戻しますが、彼の西洋式農業紹介の功績は大きいといわれています。)

この開墾農場開設の業績が高く評価されて、大友亀太郎は、慶応 2 年(1866、当時 32 歳)、蝦夷地開墾掛を命ぜられ、石狩開墾に関する計画書を提出して、4 月 23 日高木長蔵ら数名とともに石狩に入りました。早山清太郎を案内役として御手作場(おてさくば・開拓農場)をサホロバツ(アイヌ語で大きな乾いた広い土地という意味)と決定して、伏古川のほとりで開拓に着手したのです。(これが「札幌村」の原点となりました。)

当時、大友亀太郎より先に、発寒には山岡精次郎、篠路には荒井金助、早山清太郎、豊平川両岸には志村鉄一、吉田茂八らが入植していたといわれます。大友亀太郎は、田畑の開墾に先立って、資本を導入して、石狩などから多くの入夫を集めて、豊平川支流から水を引いて、北に水路を掘り進め、現在の南 3 条から北 6 条までは直線(現在の創成川)、そこから東北に曲って北 13 条東 16 丁目のところで伏古川に合流するという用水路の大工事を、慶応 2 年(1866)5 月から始めて、同年 9 月 9 日に完成・通水させたといわれます。

<これが「大友堀」といわれるもので、堀の大きさは長さ約 4 km、深さ約 1.5m、上幅約 1.8m、下幅 1.2m という

#### 北海道・マサチューセッツ協会関連イベント予定 2005~2006

- 2005 年 5 月 10 日(火) 理事会・総会・特別講演会(講師在札幌米国総領事館総領事 マリー・シェーファー氏)
- 6 月 11 日(土) 北海道を知る歴史発見の旅シリーズ①—三角山・大倉山コース—
- 6 月 25 日(土) 平成 17 年度第 1 回国際交流ランチセミナー
- 7 月 16 日(土) 北海道を知る歴史発見の旅②—円山登山と歴史散策の旅コース—
- 9 月 17 日(土) 北海道を知る歴史発見の旅シリーズ③—藻岩山登山・観音霊場めぐりと十五夜(9/18)お月見コース—
- 10 月 12 日(水)~20 日(木)(9 日間) 北海道・マサチューセッツ州姉妹提携 15 周年記念訪問団派遣
- 11 月 26 日(土) 平成 17 年度第 2 回国際交流ランチセミナー
- 2006 年 2 月 18 日(土) 平成 17 年度第 3 回国際交流ランチセミナー

大規模工事で、毎日 40～50 人の人夫が働く「一万両の大工事」といわれるものでした。完成した「大友堀」は、用水路、運送路として、多目的に利用されましたが、大正 14 年(1925)ごろ北 6 条から伏古川の間は埋め立てられました。後に、札幌から茨戸までの「寺尾秀次郎堀」と結びれて、一直線の川筋として今日に至っています。>

さらに道路や橋なども作り、翌慶応 3 年(1867)4 月、箱館近郊から 20 戸 70 余人の入植者を迎えて、田畑を開墾し、その年の秋には若干の米も収穫したといわれます。こうして、大友亀太郎は、明治以後の札幌開拓の先駆的な役割を果たしたのです。(後に、札幌官園のエドウィン・ダンなどの指導で各種作物が栽培されます。)

大友亀太郎は、明治元年(1868)7 月箱館裁判所付属となります。12 月石狩当別の土地調査・移民受入れに着手。明治 2 年(1869)8 月、苗穂村を開墾しますが、この年の 12 月に、元村・苗穂の開墾地を開拓使に引き渡して、翌明治 3 年(1870)1 月、新しく拝命した開拓使掌を辞して苦難の開拓 12 年の北海道を去りました。その後の大友亀太郎は、茨城県・島根県・山梨県の要職を経て、明治 7 年(1874)故郷神奈川県に帰り、戸長などを務めて、明治 14 年(1881)県会議員に当選、以後 4 期連続当選。明治 30 年(1897)12 月 14 日没。(64 歳の生涯でした。)

さて明治 2 年(1869)7 月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、明治 3 年(1870)5 月、開拓次官となった黒田清隆は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求め、マサチューセッツ州出身の、米農務長官ホーレス・ケプロン(1804-1885、当時 67 歳)を開拓使顧問として招聘しました。<この経緯は「HOMAS」№43 に詳述> 明治 4 年(1871)7 月来日したケプロンの指導で、早速、東京の青山・麻布に官園が設けられ、北海道に導入する作物の試作・家畜の飼育や農業技術者の養成が行なわれたといわれます。また、道内各地の視察・調査にも来ています。

明治 6 年(1873)7 月には、オハイオ州で牧場経営をしていたエドウィン・ダン(1848～1931)は、A・B・ケプロン(ホーレス・ケプロンの息子)の依頼を受けて、米国の進んだ畜産技術指導のために、牛 20 頭・羊 100 頭とともに大陸横断の苦難の末来日しました。早速、東京麻布の第 3 官園で約 30 人の生徒に実技指導を行うことになりました。そして、北海道開拓に役立つ技術者養成のために実技を主体にした畑作や畜産の技術を幅広く指導したといわれます。明治 8 年(1875)5 月、エドウィン・ダンは、北海道七重(現在の七飯)官園に、5 ヶ月の長期出張で来て、農業技術や馬の改良に欠かせない去勢技術の普及に努めました。この期間中、札幌官園、新冠牧場も視察しました。また七重では「妻となるべき女性」ツルとの出会いがありました。後に、国際結婚の難しい手続きを経て、正式に結婚。日本永住の決意を固めたのです。

明治 9 年(1876)6 月、エドウィン・ダンは、園芸担当のポーマーと共に札幌官園に転勤し、直ちに真駒内牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など、牧場の施設が整備されていきました。この年 7 月 31 日、マサチューセッツ州立農科大学学長ウィリアム・S・クラークが、ウィリアム・ホイラー、ディビッド・ペンハローとともに札幌着任。8 月 14 日、札幌農業校開校となります。これに伴い札幌官園の大半が農学校の農場となったこともあり、エドウィン・ダンも、彼等と協力して、明治 10 年(1877)我が国最初の模範家畜房(モデルバーン)を建築しました。これは、今日も北大構内に、重要文化財として保存されています。

明治 11 年(1878)、エドウィン・ダンの提言により新冠牧馬場が整備され、馬産王国北海道の基礎ができたのです。馬の改良と増殖が進められ、開拓使が米農法を模範として、馬を使用する農機具の導入を図ったこともあり、馬による大型機械が普及して、北海道の大規模農業の発展に大きく貢献しました。また、ビール製造用の大麦・小麦・亜麻の栽培等、暗渠排水による土地改良なども、エドウィン・ダンの指導によるところ大であったといわれます。(今日も、多くの農機具は、プラウ・ハロー・ホークなど英語名で呼ばれています。)

明治 15 年(1882)1 月、開拓使の廃止により真駒内牧牛場は農商務省の所管となりますが、この年、札幌農学校 2 期生の「町村金弥」(1859-1944)が真駒内牧牛場に勤務して、短期間ではありましたが、エドウィン・ダンの直接指導を受けたのです。エドウィン・ダンは、この年 12 月、6 年半にわたる北海道滞在に多くの業績を残して、東京に移りました。さて、その後のエドウィン・ダンは、明治 16 年(1883)、長年にわたる北海道農業・

畜産指導の功績により勲五等旭日双光章を受章しています。 米国オハイオ州に一時帰国しますが、明治 17 年(1884)、駐日米国公使館の二等書記官として再来日、明治 30 年(1897)まで、外交官として勤務。後明治 33 年(1900)石油採掘事業を起し、大正元年(1912)三菱会社勤務。昭和 6 年(1931)5 月 15 日、東京代々木の自宅で永眠しました。(享年 82 歳)

明治 15 年(1882)12 月エドウィン・ダンが去った後、町村金弥が真駒内牧牛場運営の任にあたりました。その薫陶を受けた長男「町村敬貴」(ひろたか)(1882-1969)が、札幌農学校卒業後、米国に渡りウイスコンシン州の牧場で酪農実習、その間農業大学卒業、10 年間に及ぶ酪農技術実習を体得して帰国します。そして、大正 16 年(1917)、石狩市樽川に入植し町村農場を創設しました。

さらに、昭和 2 年(1927)現在地の江別対雁(ついしかり)に移転して、総合的・科学的土地改良の実践による酪農経営にあたり、酪農王国北海道の基盤を確立したといわれます。町村敬貴氏は、昭和 24 年(1969)、没、享年 86 歳でした。(なお、元北海道知事町村金五氏は実弟、現外務大臣の町村信孝氏は甥にあたります。)

#### 札幌村の開祖 大友 亀太郎(1834~1897)を記念するもの

##### ① 「大友亀太郎像」(札幌市中央区北 2 条西 1 丁目)

昭和 61 年(1986)5 月、農民彫刻家松田与一氏制作による「大友亀太郎像」が、昔、「大友堀」と呼ばれた創世川沿に建てられています。詳しい歴史説明の石版もあります。

##### ② 「札幌村郷土記念館」(札幌市東区北 13 条東 16 丁目 2-6)

昭和 52 年(1979)4 月、地域の人々によって、大友亀太郎の札幌開拓の先駆的事業に関する資料、わが国の「玉ねぎ」栽培の先進地としての歴史的資料などを保存する資料館として開設されました。

昭和 62 年(1987)2 月札幌市有形文化財指定。記念館の敷地は、大友亀太郎役宅跡として史跡に指定されています。入館無料・10 時~16 時。(月曜日と祝日の翌日、年末年始は休館です)

##### ③ 「大友公園」(札幌市東区北 13 条東 16 丁目 3)

昭和 42 年(1967)、札幌市が土地区画整理事業により、この地に公園を設置しました。

その際、厳しい北国の自然と闘い、遠大な理想をもって開拓を進めた先人の偉業を偲ぶ記念公園として、「大友公園」と名付けられました。当時の歴史再発見の広場となっています。詳しい歴史説明板があります。

#### 畜産の指導者 エドウィン・ダン(1848~1931)を記念するもの

##### ① 「エドウィン・ダン像」(七飯町庁舎内) (札幌市南区真駒内泉町 1-6 真駒内中央公園内)

この「エドウィン・ダン像」は、彫刻家・峯 孝氏の制作で、昭和 3 9 年に建てられたものですが、明治初期に、ダンが畜産指導にあたった七飯官園と真駒内牧牛場との両地にあります。

##### ② 「エドウィン・ダン記念館」(札幌市南区真駒内泉町 1-6 真駒内中央公園内)

エドウィン・ダン(1848~1931)の指導により、明治 9 年(1876)から建設に着手、真駒内牧牛場の施設が整備されて、本格的な酪農畜産が、スタートしました。明治 26 年(1893)には、北海道種蓄場になり、名実ともに、北海道の家畜改良や技術普及のセンターとしての役割を果たしてきました。しかし、戦後、米軍が接収されたため、新得町に移転しました。

その後、この由緒ある建物をぜひ残したいということになり、昭和 39 年に、「エドウィン・ダン顕彰会」(現「ダンと町村記念事業協会」)により、現在地に移設され、関係資料を展示することになったものです。この記念館は、昭和 40 年から、一木万寿三画伯によるダンの生涯と業績を描いた絵画を中心に、北海道の開拓初期の写真、種蓄場の模型などを展示しており、平成 12 年に、国の登録有形文化財に指定されました。建物は昭和 40 年、札幌市に移管され運営されていましたが、老朽化のため約 8,000 万円をかけて本格的な改修工事を行い、平成 15 年 5 月リニューアルオープンを機に、地元住民「エドウィン・ダン記念館運営委員会」により運営されています。入館無料・9 時 30 分~16 時 30 分。(毎週水曜日休館・11 月 4 日~翌 4 月末日は閉館です)

## 平成 16 年度第 3 回 国際交流ランチセミナー 記録 (抄)

テーマ 「新しい国際交流を求めて～異文化理解のふれあい～」

日 時 平成 17 年 2 月 19 日(土) 11:00～14:00

場 所 KKR ホテル札幌(札幌市中央区北 4 条西 5 丁目)  
2F レストラン「マイヨール」

ゲスト:

マリア・デウィ・プスピタサリ (インドネシア) (北大留学生) (F)  
ニコラス・トーセック (カナダ) (札幌市教委 ALT) (M)  
ジャスティン・ナディア (米国ポートランド市) (石狩教育局 AET) (M)

**概要:** この国際交流ランチセミナーは、マサチューセッツ州とのつながりに基本理念を置き、アメリカからのゲストや、広く多国籍の北海道在住外国人をゲストとしてお招きして、国際交流や異文化理解の問題を論じていただき、会員同志の意見交換・交流の場にもなることを目指しています。

今回は異例のインフルエンザ流行のため、ゲストのキャンセル、当日欠席も重なりまして、結局、北大留学生 1 名、石狩教育局の AET 1 名、札幌市教委 ALT 1 名、合計 3 名のゲストをお招きしました。各テーブル(8 名)毎にゲストを囲んで、ランチを食べながら、異文化交流の話をしていたいただき、素晴らしい国際交流の時間を共有していただきました。

ここには、そのすべてをご紹介できませんので、ゲストのショートスピーチのみをご紹介します。 今回の参加者は合計 33 名でした。

マリア デウィ プスピタサリ (インドネシア) 北大留学生 (女性)

みなさんこんにちは。私はインドネシアから来ましたマリア・デウィ・プスピタサリと申します。長いので、マリアと呼んでください。

私の国について少しお話をさせていただきたいと思います。まずインドネシアの文化と言語について紹介します。インドネシアには様々な文化と言語をもっています。自分の国を旅行していても、まるで外国を旅行しているような気分になります。総人口は約 2 億人ですが、100 以上の民族がいて、300 以上の言語があります。島国ですが、国土の面積は日本の約 5 倍ほどです。地理的にはオーストラリアとアジアに位置しておりますので、そちらからの文化の影響も受けていると思います。多民族・多文化の国です。首都のジャカルタも東京のように混雑している大都市です。

今回インドネシアで大きな地震と津波が起こったことはご存知だと思いますが、日本の皆さんがたくさん援助をしてくださったことはとても感謝しています。

今日は、お招きいただきましてありがとうございます。

みなさんこんにちは。今日はお招きいただきましてありがとうございます。

私が日本に来た時は、最初は、非常に心配していました。私の日本語能力は限られていますが、何かひとつでも成し遂げようと思って日本に参りました。来日後は、日本での生活になんとかついていこうと思い、日本語を一生懸命勉強しました。語学の他には日本のマナー・エチケットについても一緒に学ぶようにしていました。また、できるだけ考えないようにしていることですが、日本に来てからどのような生活の変化が起こるのかということをもいつも心配していました。どんなに日本に適応しようと準備をしても、驚くような予想外のことは起こるものです。

まず、日本に来て驚いたことは、お肉の値段がとても高いということです。また、以前に本で読んだのですが、大皿料理を取り分ける時は、自分のお箸の反対側を使うということも学びました。また、もうひとつ気づいたことは、教科書で習った言葉は全く役に立たないということです。私は中学校で英語を教えているのですが、実際には教科書通りに話さないということです。

また、日本は表向きの「たてまえ」を重んじる社会だということをよく感じます。表向き(「たてまえ」)が良ければすべて良いという考えではないかと思います。アメリカは反対で、部分的なもの(ディテイル)が良ければ全体としても良いと考えます。それで、日本のような「全体から見る」、という考え方には少し驚きました。

この良い例が眼科での出来事だと思います。アメリカでは医者が診察して特に問題ないと言え、私がいくらくよく見えないといってもそれで終了してしまいます。しかし、日本で検査を受けた時は、私がよく見えないという、きちんと検査をしてくれました。いろんな検査が片方だけではなく、両方の目について行なわれまして、その結果、私の目は乱視であることが分かりました。

日本では、目がよく見えないと言え、その人の目に何か異常があると考えて、問題解決に向けて働きかけてくれます。アメリカでは、「よく見えない」と患者が言っても、検査をして医者が大丈夫だといえ「問題なし」とされてしまいます。しかしながら、日本のそのやり方が必ずしもいいというわけではありません。考え方の違いが面白いと思うのです。

それから、私が、少し奇妙に思っていることは、日本の社会の「グループ(全体)」という感覚です。例えば、一つのグループの中に優秀な人と出来の悪い人がいても、グループとして全体として平均化されて評価されてしまうところがあるように思います。一方、アメリカの場合は、グループの中に出来の悪い人がいると、効率化を図るために排除されて、別の人が新しいメンバーとして加えられます。アメリカは、「部分」というか個人個人の能力が高く評価される傾向にあると思います。

日本では物事を全体としてスムーズに動かす、ということがとても大切にされます。このことは日本社会の「丁寧さ」、「礼儀正しさ」が非常に大切なものとして重んじられるところに表れています。例えば、道を歩いていて何かを尋ねると、90%以上の人たちが親切に答えてくれます。

アメリカでは、特に北東部ではこのようなことは起こりえないと思います。通りで見知らぬ人に声をかけて、何かを聞きたいと思っても、相手にされずに行ってしまう人が多いと思います。

日本ではたいていの人が助けてくれます。実際、私が道に迷っていたときに、ご高齢の女性が2キロも一緒に歩いて地下鉄の駅まで楽しい話をしながら、連れていってくれました。

日本の社会では、大きな波を立てるということは良くないことだと考えられているのではないかと思います。何かを変えたいと思うならば、小さな事から変えていかなければならないというのが日本的な考えだと思います。このように小さな変化を起こす時もよく考えた上で実行するという考え方は、アメリカ人が学ぶべき所であるかもしれません。

全般的にみて、私は日本に来ることができて、非常に良かったと思っています。日本の人と話したり、生活す

ることができて、非常に多くのことを学んでいると感じています。

今回のこのセミナーで、私たちがお互いの理解を深め、たくさんの経験を共有できればと思っています。今日はお招きいただきまして、ありがとうございました。

**ジャスティン ナディア** (オレゴン州ポートランド市) 石狩教育局AET (男性)

みなさん、こんにちは。私はインドネシア語と英語を話すことができます。今日はお招きいただきましてありがとうございます。私はインドネシアが大好きなので、インドネシアから来た方(マリアさん)とお会いできてとても嬉しいです。私は、現在6ヶ月半札幌に滞在しており、とても充実した生活を送っています。日本に来ようと思った理由は、「茶道」に興味があったからです。私はとてもラッキーだと思っている事があります。それは1ヶ月前に茶道を教えてくださいださる先生に出会った事です。しかし、私は、日本語があまり上手ではないので、実際に習いながら、作法など学んでいきたいと思っています。

今日、私が座っていた席では、とても興味深い話で盛り上がり、私が住んでいる地域・教育について色々と楽しい話を聞くことができました。もちろん、他のテーブルの方々ともお知り合いになれば・・・と思っています。

わたしの出身地は、札幌の姉妹都市で知られているオレゴン州ポートランド市です。先週、大通公園で行なわれていたさっぽろ雪まつりはとても楽しかったです。でも、雪まつりにいくかどうか札幌の日本人の方に尋ねたところ、多くの方が行かないと言っていたのでとても驚いています。

現在、私は、石狩教育局AETとして、札幌にある中学・高校・特殊教育などのいろんな学校を訪問し、英語の授業を行なっています。有朋高校などにも赴任することができ、生徒と一緒に歌を歌ったり話をして笑ったりといった授業ができるので、とても良い経験だと思っています。

札幌にいる間は、ぜひとも、有意義で意味のある生活にしたいと思っています。今日はどうもありがとうございました。



## 提言紹介

# 札幌に「ホーレス・ケプロン通り」を

## —開拓使時代のメインストリート(北3条通り)をメモリアルロードにしよう—

昨年11月27日(土)、道庁赤レンガ庁舎で「ホーレス・ケプロン(1804～1885)生誕200年記念の集い」(主催 同実行委員会)が開催されました。

明治政府は、明治2年(1869)7月、開拓使を設置、北海道の本格的な開拓に着手しました。そして、明治4年(1871)、黒田清隆の招きにより、開拓使顧問として来日したホーレス・ケプロンは、3年10ヶ月、日本に滞在しましたが、その間、科学技師アンチセル・土木技師ウオーフィールドの開拓予備調査、その後のケプロン自身の3度にわたる北海道の実地調査に基づく貴重な「ホーレス報文」を残しました。さらに、帰国の際して、契約を延期して「報文要略」をまとめ、開拓使に提出してから離日したのです。(後に明治17年(1884)、勲2等旭日重光章が贈られています。)  
「報文」は、北海道の開発計画を提案し、札幌を首都とすること、農業のために高等教育機関を設置することなどを明治政府に進言しています。このケプロンの進言により、マサチューセッツ農科大学学長ウィリアム・S・クラークを第一任教頭(学長)に迎えて札幌農学校が開設(明9.8.14)されています。第二任教頭となったのは、クラーク博士に随行して来道したウィリアム・ホイラーでした。

ケプロンの提言は、その後の北海道開拓の基礎的事業に関するものであると同時に、開発すべき諸産業の振興に関するものであり、その助言と示唆は、北海道の開拓・開発に対する重要な指針となるものであったといわれます。

「ホーレス・ケプロン生誕200年記念の集い」は、このケプロンの偉大な業績を讃えるための道民有志の集まりとなりました。その後、提唱者の佐々木晴美氏(社 北海道開発技術センター顧問)を代表として、広く「道民有志グループ」の運動として「ホーレス・ケプロン通り」設置の気運が高まっています。

その趣旨は、北海道の近代化に向けた開発の原点となった、ホーレス・ケプロンの業績を永く将来に顕彰するために、かつて「開拓使通り」と呼ばれた札幌市中央区北3条通りのうち、道庁赤レンガ庁舎前から永山武四郎邸(北2東6)までの区間(約1キロ)を「ホーレス・ケプロン通り」の愛称で呼ぶことを提案するものです。

この「「ホーレス・ケプロン通り」の愛称付与に関する提案書」が、平成17年2月2日付けで、道民有志グループ(代表 佐々木晴美)から、高橋はるみ北海道知事、上田文雄札幌市長宛に提出されています。

賛同者として、北海道日米協会会長江幹男氏、北海道・マサチューセッツ協会会長森本正夫氏、後援機関として、在札幌米国総領事館総領事マリー・シェーファー氏、後援者として衆議院議員町村信孝氏の名前も連記されています。なお、当協会としましても、この運動を支援し、その実現に努めて参りたいと思います。

## 事務局短信

### 在ボストン日本国総領事館の人事異動について

2年前のボストン「氷の江戸城」プロジェクトで大変お世話になりました岩田義正首席領事(3年10ヶ月在職)と広報文化担当の渡部隆彦領事(3年8ヶ月在職)がご栄転になりました。岩田義正首席領事は、昨年7月9日付でナイジェリア日本国大使館に、また、渡部隆彦領事は、昨年12月17日付で外務本省広報文化交流部人物交流室へご転任になりました。

後任としては、高島正幸氏がリビア日本国大使から首席領事として昨年6月24日付で着任され、また、関川勇三氏が、マナウス総領事館から広報文化担当領事として12月11日付で着任されました。今年は、姉妹提携15周年の記念行事もあり、西林万寿夫総領事・大久保徹夫経済担当領事も含め、総領事館の皆様には、いろいろとお世話になることと思います。

### イクコ・バーンズ マサチューセッツ北海道協会副会長 来札

マサチューセッツ北海道協会のイクコ・バーンズ副会長が、去る2月6日(日)～9日(水)の日程で、来札されました。姉妹提携15周年記念の公式訪問として、まずW・ミット・ロムニーマ州知事の親書を携えて、高橋はるみ道知事を表敬訪問しました。これに対して、高橋知事は、10月訪問の意向を示されました。バーンズ氏は、在札幌米国総領事館マリー・シェーファー総領事、北方圏センター町田真英専務理事を訪問。また、「氷の江戸城」プロジェクトの大スポンサーになっていただいた札幌セミナー奥山義則社長や貴重なご尽力をいただいた書道家の小川東洲先生、札幌雪まつり「名古屋城」本部事務所HTB柄内佑之氏を歴訪。さらにNPO札幌ビズカフェ榎谷稔専務理事、当協会森本正夫会長など各関係方面を訪問挨拶、15周年記念事業についても話し合いました。実質的には、2日間のハードスケジュールでした。

### 第3回米国セミナー開催予定：講師は在札幌米国総領事館マリー・シェーファー総領事

5月10日(火)、新年度理事会・総会終了後、第3回米国セミナーとして、在札幌米国総領事館総領事マリー・シェーファー氏をお迎えしまして、特別講演会を予定しています。道庁別館12階の北方圏センター会議室(16:00～16:40)で開催いたします。会員・学生、一般の方など多数の皆様のご参加をお待ちしております。(無料)

### ファイブカレッジセンターの北海道教育視察団来札予定について

ファイブカレッジセンターのアジア研究プログラムによる北海道教育視察団22名が6月29日(水)～7月3日(日)(5日間)の日程で来札予定です。ニューイングランド各州の中・高校の先生方のグループで、研修内容としては、市内の学校訪問、日本の地理・火山についての学習、アイヌ文化資料館、小観光、ホームステイなどが予定されています。後日、「ホームステイ受入家庭募集」(7月2日(泊)～2日)のお願いを致します。(協会ランチセミナーは未定です。)

### 2005年北海道・マサチューセッツ州姉妹提携15周年記念訪問団派遣日程について

2005年10月、北海道知事・北海道議会議長を中心とする代表訪問団が、アルバータ州(姉妹提携25周年)及びマサチューセッツ州(姉妹提携15周年)を訪問して公式協議・記念式典等を行う予定です。当協会の15周年記念訪問団派遣もこれに合わせて、ボストンの州庁舎ステートハウスの記念式典に参列することになりますので、日程および記念事業等は下記のように予定しています。

10月12日(水)～15日(土)	札幌発 → ボストン着	ボストン(泊)
	ボストン観光・セイラム観光	→ コンコード・ボストン(泊)
	ボストン公式行事参加	→ コンコード・ボストン(泊)
	アマースト	→ スプリングフィールド(泊)
16日(日)～18日(火)	ニューヨーク観光	→ ニューヨーク(泊)
	フィラデルフィア観光	→ ワシントンDC(泊)
	ワシントンDC観光	→ ワシントンDC(泊)
19日(水)～20日(木)	帰路 → 札幌着	(機内泊)

今後、詳細日程につきましては、関係方面と打ち合わせて調整して参ります。姉妹提携15周年記念として、滝川市・七飯町・新都山流尺八聖琳社グループなどとも連携しながら進めて参ります。また、ニューヨーク「北海道ゆかりの会」・ワシントンDC「道産子の会」の方々ともお会いする予定です。会員をはじめ、一般の方も含めて、多数の皆様の訪問団参加申込みをお待ちしております。(詳細日程は、若干の変更が予想されます。別紙募集要項・申込書をご覧ください。)

### 新入会員紹介(2005年12月10日以降) <個人会員>

佐々木 晴美    工藤 賢一    温井 潤子    徳永 玲子    岩崎 修子    浅利 公恵  
高崎 泰彦    杉岡 理香